

東山十百韻

乾卷

共二

特 別

Λ5

6590

39(1)



八五
6590
39-1

文政六年三月

獅子先師百回諱大會於洛東雙林寺
十百額興行

十三日墨直一會式

右ハ靈前又備浴ヲ捧上ヨリ裁ヤル

十三日十百額

卯ノ刻刻者着座未下刻滿尾

二見形
一文字臺五脚

画

双林月峯
固防文水
河原出雪
系 噓吹



右之目録祝言等御子及御中御美濃國
山縣の和太と云々之者甚多あり

式

- 一 諸礼停止
- 一 月卷一句
- 一 出合遠近
- 一 一句一直
- 一 自句三連

一 宗匠文墨執事

一 仙
京 蘭江

一 諸国文墨執事

子琴
茶烟
京 吹

一 列席七十有四人

代香と首き
 一 十四日 本朝 養正 七回
 一 雨岡庵 十三回
 一 樂菴 七回

各短可也

一日日餘興百頁

一客對 三ノ 車三

一中配 三ノ 一枕坊

平安

共ノ平安

一書記

京

笑山 咏雙 仙唐

序詞

諸越於史記一依俗の笑言あり五朝乃
 上吉一依優の神字免あまさしとまひり名
 あゝゝと道傳りゝさりし
 吾名吉他乃之る吟金よけ免て山風を用
 關一終ひて世道あまらるに普く海内よ
 流布す然一と事二世の道鏡獅子

老師といふては 祇翁の送符を
著したるひてより 船夷の子島乃果
あゝぬ火此瓶は糸のふゆく 中そもむの
遺風を慕ふはとい婦ものなく 廿歳の
規矩を以時り 定字しんまをいふ通し かくて
は師世り 打ちたなりあひて 日々既に
一百年の遠きよなんし 守りては
此通より 取越し 洛東金玉山の書道に

此を十百顔の吟書を 供養し 彼の
大因り 報ひまゝ 九世の道統
徐風大空師の志願をり けり 其書の
獅子老師の遺風を 次て 彼の
心とあゝし 一ハ乃巻を 配題し 供佛の
を 誦法は 尾の巻は 中師自筆の
夕作り 傳書に 頌徳を 作し 終り 追遠に
家傳をも みるや けり 日席を みる

のちて二見形文皇を肺を備ふ柝此
ふおとみの國山縣北松本より梅子元
のせ海よりのは道よ不易の常盤城志
させ終ふ中師社ら流つていよと
志のあ川たけ倉よあまんて池あり
や海陸あり或は官制のいよとよはひある
ハ農事此時をたつてふ里を遠とる
海ある國を船を池山あり都を馬が成た

のちかみになつて河をよけまはけはは席
はつたも人々大元を教百人よりは是
はく已に此後と中師の揮魔たに成る
ゆゑんより一尊守靈もなるといふみしうけ
終るさむや程も二師の繕ふあともかや
あめり道徳篤信の心を代はる靈魂も
加護なきは欠かむる能ふあはるさあれとも
けささ美しき葉といつて草のいつとあはる松の

うはくす情永く成望なるおとと祝して長丁の
隠士 粘松葺鳥籠 沙人布まよし かくをたこ
角く古掃ふ餘教亮毫と深て法局の
詠定下よ

誠惶く頓首百拜して在



遺吟卷

獅子老師

櫻さくひとてう 酒地の御家うら

花のぬれ乾此志のまよふ

夜よ乃あつ序のり終うや

沸ひ此外一ちをさるん

洗滌の救もぬま乾い

堂くやとまぬ先拂ひ

やあく新中川青の羽

徐松葺

素由

尋松坊

一松坊

鬼角

白己

凡そ過ひも市成し後
 出陣
 新造の利し細き河津昔に
 榮下
 中ももも公さけ子こそや
 夜高
 法のもなき風を名に
 楓廊
 あしき御さ島京の
 柳眉
 買えぬかたはほしき
 葎片
 上河舟宗合は花の
 木根
 作らぬ河津校のまじ
 文雅

赤い綱よよのほしめ
 其山場
 月影をわすれぬ
 文水
 てもり鴨をうて
 不届
 定火をふらふ
 卜指
 夢をさそ
 山花
 仇口をさす
 山花
 詠も
 仙度
 たふさしく
 月峰

妹嫁つゝるゝの尾の新刺
 おこそのぬ道りー用道の小燈灯
 としあ時際そく借ふあまよく
 おろに鉄の漬^漬おろー石留
 茶未人あまそおろの早戻
 短日の都面ひうとくーむて
 懐ふまふ人まふ紙入お状
 七やつまーや溜るけしとすし脚り
 くら
 東良
 筆名
 花留
 二二
 流丸
 二葉坊
 茶尾

白帆をわさる。業をさくー
 神の治々人の世も若者ー
 醉人おまーと端を味ふ
 ぬり道月も思ドてんをさかり
 狸の都有も鼠ーやむ林
 着着て列傑の宿ーとーと
 新くこよあれ眼の上は塔
 陸奥も武風も三々をよむか
 東投
 和声
 新士
 芳例
 旨者
 可流
 洞水
 巖馬

ニウ

清々洞心晴々一掃さ白
鳥々羽力なきも年茂川
長体こそ一羽一洗てさ
侍る心年々風の若にあは
月も清いな合致入新
皆あまの歌原をう結る世の急
下手の杖磨もつれこれ伽
斎りす免いお鳥のゆるる癖

昭陽
咏雙
和秀
真雪
冬柳
一仙
柳志
鹿臥

鯛の色照る鯛う向き
う川々々ちほくせのきほ
たやの花あまたま守袖し
用心のるもくくく此秋葉望
お国音あはは正了西林角
小湊もるへく人きい狭く書
定する縁よ方角の悪痛
出さぬい出ぬのまき礼をよ

茶煙
祝破
湖又
碩糲
白李
高桂
其園
煙吹

秋の勝す一月も函く
 かゝ凍の志免りも持ぬ晴晴交
 大進の如の端一列しき
 積ねる老心後身なを案らま
 ちの如神よ園のむつてし
 とくさくおあまき
 流りはりよ園情の損
 深くぬぬお手傳ふ雨辰の月
 芦夕
 欣之
 品友
 妻峰
 左琴
 右松
 推荷
 五敵

^三 殿下と彼祖の勢若るまお侍
 ち一歌く土まも律の音成打そ
 昔のかりりの風かさりらん
 画拂ふ仄よまお歌く御茶よめ
 後の唐も恒先を露の世
 又よも法考れも婦よ勝も
 ようりての勢明つさむ丁急
 藤絡をく楠の梁も目さるる
 盧堂
 一貫
 天山
 杉亭
 一の字
 南之
 誇白
 良邦

移因り真ね塩竈の株 大系
中元此加つし男も日初 子孫
出るよあ約のそあし 目出交 茶
右百負一順

其之花

志山や花よりゆくむ咲の香 三多坊
春ゆきやうた掛き水侍 其雪

其之鳥

湖と目よりんまうへや空とまき 木隠
脱道し笠も乾く梅雨晴 碩獅

其四月

名月や心より浅き春の序 楓斎
獲の草もともて所 廬堂

其五雪

うらた雪をもぬおく旭 其山坊

酒さるあけてあるもさる 一枕坊

其六 飯

明遊坊

大釜の飯もあつ 十夜る

西ゆりるにるるあふ 場 湖夕

其七 茶

柳志

下戸さるもろくさるておるお新茶

陣さるさるのほくさる 杜宇 可洗

其八 菓

あり乃さるやさる何さるの産の菓

二ツ穂

うらあさるさるさる月此友 二高坊

其九 香

又穂

そさるの煙さるさるさるの雨

魁のさるのさる何さる増すさる 高観坊

其十

雑乃句さる向

あつたあつた道毎身とて 百年とて

深風集

後のかくこのころいあきとけ

子琴

浴せしぬ吹の習わぬわたり

麻呂

越ひてくわもてんをるる方業

其山坊

目もたらはれとぬわるれとて

太素

解やとらふく走りぬわたり

久水

中にもぬあし曲物控りし

出雅

よみ代の連く更ぬ其皇所

冬極

やまの越く奉公のせん 標

葉江

白米拾はせ又穂て来りしとて

白包

今れ此を雪此深も 曆あり

仙彦

か鳥くはぬのまろき 信誓

表多

新の本の志あり能きと 入をとり

柳舟

きもも動りてハるのすむ

昔守

鳥くぬ情土の精史やも 契すのれ

正琴

望しとらひあし北の縁

二葉露

旅をよと月毛の駒と身送りて
 寄とらうもははあすあを待
 ねとらう世をまはれの籠れま
 仮の少糖の鉄よなるとあ
 産さうして老よはまゆき日の昇
 人何れもあはれぬ存の餌
 又よま——木方ののきさし夏隣
 聖おの山聖おの
 池

杉亭
 本徳
 久孫
 多草
 柳眉
 不得
 公心
 柳酸

行る地へ平あの名知を昔は
 好くさるものへ存り
 入比を急て結ゆる味あるおあ他
 柿は羨も籠れま
 寄るものへあはれ風のきるはれ
 大々おあるへ森も籠れま
 寄中うういせ音籠のすこし後
 寄物をとすてまおあへ

之良
 素由
 一柳坊
 ト指
 二籠
 少花
 栗板
 芳酒

増減のせぬも目おしきき 貞もの
 通解の先く 宿す 酒
 二ふまると 福矢し もまきく 三のり
 柳の 凡情 交し 中きん
 宮女の 第 自きり 了 家 前
 下 結解し 晴し 無ひ 孤
 都らひてし 解し 三 紙の 表あり
 幸あふもこの けり 改のきり けり
 流丸 湖夕 花泊 碩獅 赤雪 白孝 眞名 想花

牛の子の 遊ん けゆく 高を 付るひ
 竹 羨良の 候し 禱ぬ 牛 僧
 同も 身のを きき むし 此七 孫系
 揚も 此人 寄り 更し 傳し 月
 細 除きて くる のお ちの り 階ぬ
 吹も 定免 凡 樞し 入る かも
 おも 出 事ぬ 塗 土お せり けり
 ありし 名ぬ のきり 氣 此 女 子 婿
 其 園 新 土 旨 有 柳 桂 菜 尾 和 赤 芦 夕 籠 菊

津の国も大和もあへてむの今
 麻と端やね細の縄をも
 我ををを男さふひ乃年きて
 法代をうらむお品の三神
 村雨のきし乳や枯くそは影
 出し草やうらむささ 菫 瓶
 能く是子やうらむ果報の五三
 多此うらむ縁とと能く家と
 鬼角
 明水
 和秀
 吟史
 飲之
 葉室
 可字
 一仙

死あゆむまよまへ白あ明まぬ道
 早極市の根付くころんゆ
 兼長る友又杖の立とくめんそ乳
 能くはぬる信正然の山
 寄るも亦も世後さあに
 まく力かぬのかり人下位
 月ほた曾も盆の踊り二癖
 葡萄菫益も栗葉の加川も
 月峰
 洞水
 柳志
 友和
 良邦
 交算
 朱二
 虚堂

双玉もあやうに任せられたるの程
 一貫
 筆入る如く虹の立ちしり
 笑山
 洗ひぬ時をさるるさ 向ふ急
 五飯
 赤くかきうてきるもゆるき
 早友
 人目さくはれぬと春月子を侍ん
 可洗
 恨もなまらぬあやうの年浪
 浪白
 雪海老のかかる麻雨も風荒て
 南之
 用炉裏焚かぬまこと起ぬ象
 いそほ

所をさうたれさるるもさるる月
 茶烟
 破も胎ももさるるて破麻
 壺吹

赤百韻一順

赤く庵主二十七回講

徐風庵

いく妻やあひめさるる師の心
 冬柳
 目もと寝てひてもえぬる月を
 文水
 二情さるる山のあひく旅ひ子

餅と酒とよき道の追ふ
徳の自慢の幕が新衣同土
巨魁のか減いも川あけり
風ささく名の如長の影もま
坊さても清き富土川は波
二親の目をとりのひそく物も
礼日の人よく加え着る
笑かお柳も知らるる
つよつよつよつ

出鱈
柳眉
良邦
一枕坊
二高坊
素由
茶二
是山坊

まよ海苔永く障のあき
飯持も保て達ねは是り
髪のかみ木をひり
如百合の着さし
雨ふふふふ
紫割衣をきく
寛こと歌く
郎侍もあきく

花守
馬道坊
葛守
名琴
文雅
不乃
柳枝
柳也

到一る坊又厚後多
 去此子又あこころ家思ひ
 進めしつこき旅の去見直
 花の信せしと今又魂連く
 百味のかすみの如き
 古鏡あり

ト指
 鬼角
 旧あ
 本徳
 茶白

雨園茶亭主十三回忌

付やあむせうと思ふ山妻
 春もあふれ入おのてん
 毛纏小角力取中も五中此そ
 是れ我衣成白影り侍
 是るもくもぬ月の歌合を
 乍庵さか電も徳くお妙
 初修りも名玉の智直とさかり
 なみ柳櫻花酒乃とちとめ

徳風茶亭
 仙度
 白也
 甚之
 可洗
 依丸
 茶色
 是之

院つ了平の林くり附日

おそ定のをを在たさすの事

かゝのそりうりく嬉れむの信

味ハ〜〜〜〜〜

察〜〜〜〜〜

五月ふふと交雨北柳をる

西さ〜〜〜〜〜

いふ〜〜〜〜〜

和部

巖石

言部

旨者

和身

花伯

古書

歌文

山原の信々軍一の沙汰もなし

毒々山々〜〜〜

風と煙陣交を合ふ雪の月

遊〜〜〜〜〜

毒々〜〜〜

旅の影の如く〜〜

さ〜〜〜

殊〜〜〜

李投

菊室

眼出物

柳志

麻嶺

忠思

訃士

一仙

右 権哥一行

この日の大倉町をいふもさうさうと文は
十三回なるは道も官務の身の
自由ありぬは道も一合はる

姉 ねむりの月と 瞳うや

青縁

一 樂菴主七回譯

月夜や浮世のそこの七免なり

深月菴

師の影をくく今も傷を

甫三

比をくくを解く湯の川をば

茅州

買ひ出は糸綿を賣るり人海

白子

飯糰をくく女房をくくをけりありて

女房桂

さしめを可居く一杖の夜を

七巻

みくくもせきも夜ふああの中

遊夕

佐殿の身のあはれ焼の葉

煙吹

茶も酒もあまもふ自在徒

若夕

夜ほほくく山畑 正一圃

飲之

署のさかゝるごとく 藤のふん
 よみ紙をしくなる 精由
 ちのらの内ちと何ものあつて
 礼をことわりおまのあはれ
 ちのうし 鼓のあまの空免あま
 身はめてもい 葉ふふあふま
 新い号れ人といふうとちりさる
 陰 始もまきい ぬき月
 碩猶 可字 推了 友松 夏峰 一賢 太事 虚室

引細くよる魚を待捕つてま
 鳴る保ちをふ保てさうつま
 本保ち出保の名をとも 赤いん
 時ともまきい 小鶴鶴のかほ
 葉の伝はるもよるも 苦いしん
 埋もれぬ名は葉おらるも
 杉子 号友 五前 海老白 子琴 茶烟

ちねより

餘興

榮烟

聖王何んぞとて飲く日惜みりり

得やあもも隔たをそく友

新土

お出をそし人を招き向ううかき山

茶二

山由ももるのてらるのい海

山花

宗什者してあつりおたつきを合

橋二

携る縁深清は小袖法衣

心をほ

秋もらねお十りふとそぬ影の月

月峯

春もやうそあしを美とそあ

笑山

列彦名録

空りるもの依りまわぬ影

出たて山

太素

あ池をそしそむ名の柳りそ

雀園

文雅

乙もや影そは門の

僚

柳眉

紺津川

日此猶もさうくまき支安きりくわ 極志

妻の猶もふりりりあちのむ、ト指

すしき所お右アの雨はまきこころ、見付 杉亭

出代やうあうあういさううい紙向、石見 諺白

菜の花りーを目のやうく山家元、唐堂

白魚の姿をさうりりや帆魚、舟、出中 以水坊

るさうあふふの多々支斜くまうか、友峰

依山あふまきかけたり、鮭くま、か茂 麻呂

雨ぬくまき際子ひけい柳くわ、龜山高 枕破

夕影や鈍く遊り、周麻、休吉

おきくこ扇も拾ふ以て下うか、夜き

音上歌の解く、見さから棲赤、碩獅

友暁く、日わう、あうぬ々々、長山 菅別

よみ芝のうへもみゆく日わうか、長山 菅別

明きや札も通うあむ免の風、長山 菅別

朝一はく、二層、三層のまき、式、長山 菅別

長余さや淡路へ通ふ船のむら、舟木 五畝
 よろ船や板へ信むぬのいけ、固防柳井 千石房
 のくまこと備前へ十のききやうぬ、
 雛子啼や暁あそききを毎坂、
 ぞ有啼しちに秋のあそきをあうぬ、
 祿くの杉城子浦の日おくをあうぬ、土左言 左共
 甘きうもあそきもあうぬり沈の板、
 ぬるくもの吉ひぬま生のきき博八、
舟木 五畝
固防柳井 千石房
 文水
 田ぬ
 左共
 柳高
 花泊
 可洗

明さや一対さうりり月とあ、河津村ぬ 二石
 種ぬり柳の髪を洗ひりり、
 川城ふ菜のむ白ふおそきうぬ、
 淋るるる一きるるあそきあうぬ、
 春の歌のききりりあや啼し、備前山 冬松
 侍とさあるりりりや梅のき、美作 鬼七角
 安おてるるるるあそきあうぬ、銭か福川 木隠
 暖縁三甲なふるあそきあうぬ、白 白子

山川や花あけ時麻の南麓へ
 親志の宮り帳争や朧月
 舞うや一きつちるもの申
 川ふののたる山とさるう柳う風
 後一待馬又眠影や春のふ
 言はれ春はふしく柳な
 鳥の巣や新め花の折つ木
 谷向くとやうも出ぬ出極
 其園
 一貫
 芦夕
 推荷
 良邦
 の子
 菜庵
 似之

陽光く田とすく年の追うれ危
 利未受く度くみるる所支なり
 雪解や候もまじき早うら
 枕候や軒も掃りぬ甲まらま
 うちあく文の色ゆる四糸う風
 茶うおふ人もあうけむせり
 谷まきつ一日ゆかり春の節
 鳥のる木のつづよこは日初う水
 赤桂
 素由
 不乃
 如多
 友松
 草字
 二節物
 茶畑
 尾名後五

甲申年

雪もや傍子の後の統ます

手尾のちういさなあ温まり

押しける馬りあい御あ柳りぬ

吹きつてまるくく月りぬ

七程のあ里もある物子らぬ

のとりさいまりく出るや山く山

片まのの子まりく山後にぬ

月の尾く所も所もあすとる

祈士

白色

湖夕

煙吹

月輝

山色

とほ

笑山

ひらきく二月りぬ

ちと社の後をついぬは梅未ぬ

京まりくあるまるくく春のをぬ

つきあいゆくあるりく梅の花ぬ

世余やぬのあ比命の山

西東周あるくむの所をくる事ぬ

徳一ぬ手の踏ある出づかぬ

答ひくりあるとる後るはしぬ

呂又

梅と

蘭江

仙危

子翠テ

南之

流丸

箕石

不^レ思^レく^レ終^レむ^レ月^ノの^さく^くの^りか
 亮^くも^もつ^くま^くす^く董^元
 方^亦や^終も^ん毛^はく^帰る^鳥
 牛^ノの^背を^と押^入て^終も^眠る^らん
 夕^夕月^や梅^もも^すゆ^く垣^隣
 海^山の^をあ^くて^終も^んら^ん
 柏^まく^さく^の園^大の^部可^千南
 山^江の^所や^ある^おも^たる^もの^る
 石^方有
 和^秀
 其^衣
 公^心
 李^の枝
 早^也
 一^思仙
 一^極坊
 徐^凡茶

久^政十一^子五^月中^旬寫^終

東^海林
 松^一

